

経済産業部

特集
3

商店街づくり・まちづくりをめざして!!

「中心市街地活性化シンポジウムの開催」

はじめに

中心市街地は、商業、サービス業など様々な機能が集まり、人々の生活や娯楽、交流の場として、また、長い歴史の中で独自の文化や伝統を育むなど、その街の活力や個性を代表する「顔」ともいえるべきところだと思います。しかしながら、近年、モータリゼーションの進展や郊外型大規模小売店舗の進出等により多くの都市部において、中心市街地の衰退・空洞化という問題が深刻化しております。

こうした中、経済産業部では平成十四年度から中心市街地活性化・創業等支援事業として、各地域における中心市街地活性化のノウハウや先進取組事例等に関する情報提供・分析、意見交換を行うことにより、中心市街地活性化についての理解を深め、さらに推進していくことを目的に県内各地で中心市街地活性化シンポジウムを開催しています。



平成十七年度は、国際通りにおいて開放された道路空間の活用による商店街の活性化や高齢者・障害者にやさしいまちづくりを目指したトランジットモールの導入に向けて取り組んでいる那覇市と、住宅改良事業と区画整理事業を進むうるま市において開催いたしました。

両市で開催されたシンポジウムの内容をご紹介します。

国際通りのトランジットモールを活用した中心市街地の活性化
(那覇市中心市街地活性化シンポジウム)

平成十七年十一月十八日に、那覇市ぶんかテンプス館において「国際通りの

新生うるま市の魅力あるまちづくり
(うるま市中心市街地活性化シンポジウム)

平成十七年十一月二十六日に、うるま市安慶名公民館において「新生うるま市の魅力あるまちづくり」安慶名地区の活性化と中心市街地の空き店舗ゼロをめざして」をテーマに開催したうるま市中心市街地活性化シンポジウムでは、北山孝雄・北山創造研究所代表が「まちは、元気がくひと、まち、商い、生活を豊かにする界隈づくり」を演題に基調講演を行いました。講演では、「モノがあふれる二十一世紀。モノを置き、商店を並べただけでは中心市街地と呼べない。情報や文化、歴史が集積されていたり、人々の関心が高い健康等について、情報とその解決策が得られる場所であることが中心市街地の役割だ。

そのためには官・民・住民が工夫を凝らし、汗を流して取り組むことが必要だと一丸となった取り組みの重要性を強調しました。

また、坂本和昭・北の起業広場協同組合専務理事は「僕らのまちづくり」自慢が誇りに」をテーマに帯広市の「屋台」をキーワードにした地域おこしの先進事例を紹介し、屋台はコミュニケーションの場であり、そこに行けば何か面白いものがあると感じさせる必要があると述べました。

パネルディスカッションでは、阪井暖子(Planning & Producer Studio SA)まちづくり・まちあそびプランナーをコーディネーターに、再開発事業が進む安慶名地区で街づくりに取り組む住民代表らが、中心市街地活性化に向けたそれぞれの熱い思いを述べ合いました。



▲うるま市シンポジウムの様子(提供:沖縄タイムス)



▲うるま市シンポジウムの様子



▲那覇市シンポジウムの様子(提供:琉球新報)

トランジットモールを活用した中心市街地の活性化」をテーマに開催した那覇市中心市街地活性化シンポジウムでは、福田敦日本大学理工学部社会交通工学科教授が「交通システムと街の活性化」について基調講演を行いました。講演では、トランジットモール導入の要点はバスとモノレールの連続性、多

様なアクセスが必要であり、歩いて楽しいまちづくり、歩いて楽しい空間の創出、歩くことを可能にする工夫が欠かせないこと、また、公共施設を中心市街地に戻すことがこれからの那覇市の課題であると提言しました。

また、三橋重昭NPO法人まちづくり協会理事長は「歩いて暮らせる街づくりコンパクトシティ」について、原宿表参道や韓国ソウル市の先進事例を紹介し、これから人口減少社会になるため、コンパクトでにぎわいあふれるまちづくりへの転換が求められ、選択と集中の総合的なタウンマネジメントを構築しなければならないと述べました。

引き続き、福田教授をコーディネーターにパネルディスカッションが行われ、事業者やNPO法人などのパネリストが意見を述べ、「歩いて楽しい那覇の街の復活」をテーマに様々な問題提起がなされ、質疑応答ではフロアからも熱心な質問がありました。



▲トランジットモール社会実験の様子

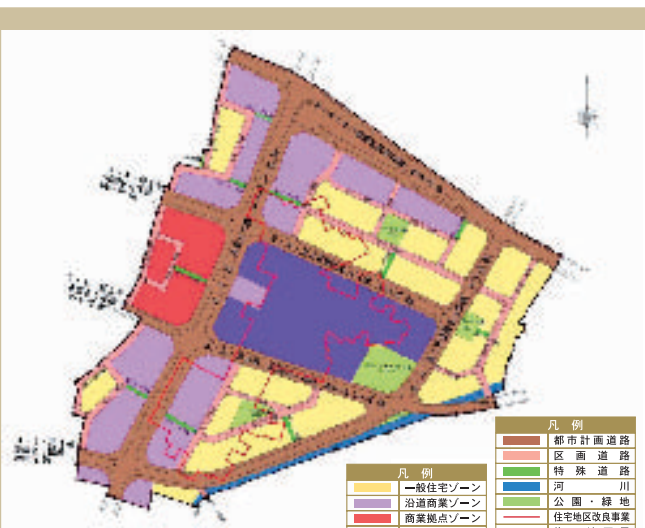


▲那覇市シンポジウムの様子(提供:琉球新報)

建物形状や広場、路地のデザインはイメージです。



▲安慶名地区商業拠点イメージ図



▲安慶名地区土地利用図(案)

